



共同通信



2010年7月18日 167(377号)

日本基督教団 西宮公会教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町10-22
TEL0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email : koudou@gamma.ocn.ne.jp
<http://koudou.jp/> 振替 01170-3-4901

To tell the story 67 西宮共同幼稚園との出会い

小学4年生の息子(尚紀)と小学1年生の娘(紀春)が、6年以上お世話になっております。

突然ですが、皆さん!! 第一子の幼稚園探し、悩まれましたか? 私は正直、とても悩みました。

今の尚紀の生活からは想像もできませんが、1日2回、1回2時間以上のサバイバルな公園生活、しかも1歳にもならない紀春を連れて・・・だったので、本当に大変な日々でした(ストレスで片耳がほぼ聞こえなくなった時もありました)。

このしんどさから解放されたい一心で、尚紀を3年保育の幼稚園に入れることを決意し、いろんな幼稚園の説明会に参加しました。

いいことばかり主張する幼稚園の中、西宮共同幼稚園の説明会は一風変わったものでした。順子先生が「この幼稚園には給食も送迎バスも延長保育もありません。そういう事を希望されているご家庭のご要望には、残念ながらお答えできません」とはっきりおっしゃり、「なぜなら、この幼稚園はお母さんの愛情たっぷりのお弁当を子どもに食べてもらいたいし、送り迎えの道中で四季の移り変わりを親子で楽しんでもらい、子どもとのかけがえのない時間を大切にしてもらいたいから、敢えて延長保育はしません」と堂々と語られました。(7年前なので、細かい言葉はかなり違っているとは思いますが・・・)

時代に振り回されるのではない
あの時 心を躍らせて生きた
後悔に 身をふるわせたこともある
笑い 泣き 歯ぎしりをした
今日 こんな決意をしたという

自分の人生を語ってほしい、
自分の人生を語ってほしい、
自分の人生を語ってほしい、
自分の人生を語ってほしい、
自分の人生を語ってほしい

幼稚園の子どもを預ける＝しんどさから解放されるのではなく、子どもが家庭からもっと広い世界、もっと多くのことを学ぶ為に幼稚園はあるのだ！と一人勝手に理解し、感動しました。

あれから7年……。子どものことを考えて西宮共同幼稚園と出会った私ですが、子ども以上に楽しい幼稚園ライフを送らせていただきました。

毎日の送り迎えに、月に一度のわらべうたをはじめ、たくさんの行事……。そういう事があったからこそ、親の私にまでたくさんの大切な友人が出来たのだと思います。子どもと同じ学年のママ、パパはもちろん、違う学年のママ、パパたちともたくさんお友達になりました。今考えれば、「なんで、この人と友達になれたのだろう？絵本の勉強会だったかしら？畑作業？カレーパーティ？クリスマスコーラスかな？」と不思議に思いますが、『人と人をつなぐ難しい働きをしています』という西宮共同教会・幼稚園だからこそ、きっと私

とたくさんの友人をつないでくれたのだと思います。

そんな数多くの友人の応援があったから、昨年、母の会代表をなんとかやり遂げられたのだと思います。

そして、勇気を出して役員に手を挙げたことにより、また新たな素晴らしい仲間と出会い、最高に楽しい一年を過ごすことができました。あの時、がんばったから……。一生懸命取り組んだから……。すべての行事が今までで一番楽しかったのだと思います。

そんな楽しさを教えてくれた西宮共同幼稚園、園長先生、順子先生をはじめ、たくさんの皆様に心より感謝しております。

本当にありがとうございました。

(石原 玲子)

故松尾俊美告別式式辞（2010年7月11日、西宮公会教会牧師菅澤邦明）

今日、松尾俊美さんを送る告別式の式辞を申し上げるにあたり、一人の牧師としてだけではなく、父であった人の一つの大きな体験、およそ70年前の戦争のパプアニューギニアで、父が（父たちが）体験したことに触れさせていただきます。今日、選ばせていただいた聖書は旧約聖書列王紀下6章23～31節です。告別式に選ばれる聖書ではありませんが、父たちの戦争体験、“戦争と飢餓”のことが言及されているということで、選ばせてもらうことになりました。

その後スリヤの王ベネハダはその全軍を集め上ってきてサマリヤを攻め囲んだのでサマリヤに激しい飢饉が起った。すなわち彼らがこれを攻め囲んだので、ついにろばの頭一つが銀八十シケルで売られはどのふん一杯の四分の一が銀五シケルで売られるようになった。イスラエルの王が城壁の上をとおって、た時ひとりの女が彼を呼ばわって「わが主王よ助けてくださいと言ったので彼は言った「もし主があなたを助からねば、ならば何をもってわたしがあなたを助けることができよう。打ち易い物をもってか、酒ぶねの物をもってか、」彼女は答えた「この女はわたしをかって『あなたの子をください、わたしたちはきょうそれを食べ、あすわたしの子を食べましょう』と言いました。それでわたしたちはまずわたしの子を煮て食べましたが、次の日わたしが彼女をかって『あなたの子をください、わたしたちはそれを食べましょう』と言いますと、彼女はその子を隠しました。王はその女の言葉を聞いて、衣を裂き、王が城壁の上をとおって、たが民が見るとその身に帯布を着けていた。そして王は言った「きょうシャバデの子エリシャの首がその肩の出さわって、るならば、神がどんなにわたしを罰してくださるよう。」

（列王記下6章13～31節）

• 2006年に、特別養護老人施設で世話になっていた父と家族とで、施設から近い飲食店で食事をするようになりました。その時、最新のニュースである、米国によるイラク戦争のことを話題にすると、「戦争はよくない」と、静かにきっぱりと口にしていました。（20代の初め戦争の時代を生き抜いた父たちのことについては、2010

年7月11日の西宮公会教会週報、“小さな手大きな手”に書かせてもらっていますので、ごらんになって下さい）。父たちの戦争体験の、中でも「捕虜と逃亡兵は食べてよかった。ハンゴウからはみ出した“肉”を持ち運んでいるのをみた、僕は食べなかった」を聞いたのは、結婚してそんなに間もない時だったように思います。お

よそ40年程前のことですが、その言葉だけは鮮明に残っています。その時に、それは何だったのかを確かめることはできませんでした。この事はそれ以来心に残り、いつか“確かめなければならない”“聞かなければならない”ことだと思ってきました。しかし、「捕虜と逃亡兵は食べてよかった、ハンゴウからはみ出した“肉”を持ち運んでいるのを見た、僕は食べなかった」というようなことは“聞き出す”ことではなく、それを生きた人と対等に向かい合う自分があって、初めて可能だろうと考えていました。例えば、「ひかりごけ」(武田泰淳)や「レイテ戦記」(大岡昇平)などを読むことで、この国の戦争の飢餓の戦場の“惨状”を知ることで、父と父の体験とに向かい合う試みらしきものをしてはみましたが、しょせん“聞き出す”位置を超えられないままでした。数年前、太平洋戦争の父島まで起こったとされる、“米兵捕虜人肉食事件”の雑誌記事を、それとなく施設の父の部屋で広げてみましたが、注意して見るということをしませんでした。対等に向かい合って、父たちの戦争体験を聞くのには“遅すぎた”のです。

列王記上6章13～31節の、シリヤ王ベネヘダテのサマリヤ包囲の、兵糧攻めの飢餓の中で起こったこととして書かれているのが、“それでわたしたちは、まずわたしの子を食べま

した”という出来事です。という自分たちの身に起こってしまったことを、イスラエルの王に向かって“わが王、主よ、助けてください”と訴えます。この時の“助けてください”は、飢餓からの助けでもあるのですが、“わたしの子を食べました”という、我が身に起こってしまったおぞましい出来事からの助けとして申し立てられているように読めます。王はその女の言葉を聞いて、“衣を裂き”“その身に荒布を着け”更に言います。“きょう、シャバテの子エリシャの首が、その肩の上にすわっているならば、神がどんなにでもわたしを罰して下さるように”と。この時の王の“衣を裂き”“身に荒布を着け”は、旧約聖書では「そこでヤコブは衣を裂き、荒布を腰にまとして、長い間その子のために嘆いた」などのような例として書かれています(創世記37章29～35節)。血にまみれた息子ヨセフの衣服を見せられた父ヤコブは、「我が子の着物だ、悪い獣が彼を食べたのだ。確かにヨセフはかみ裂かれたのだ」と嘆いて、“衣を裂き”“荒布を腰にまとい”ます。(そこには、“兄弟殺し”あるいは“兄弟を売る”などのことが画策されていたのですが)。

“助けてください”と訴えられ、“衣を裂き”“身に荒布をつけた”王が、それをしたのは、女たちの側に身を置くのではなく、エリシャに対する激しい憤りからでした。エリシャの助

言で、平和的に共存したはずのシリアによって、包囲攻撃を受けてしまったことに対しての、言わば逆恨みです。

10年ほど前に、父たちのパプアニューギニアの戦争体験についての、手記・記録を預かることになりました。中には、父の直筆の手記も含まれていました。父の手記は、野戦貨物廠主計少尉として昭和18年(1943年)8月頃にパプアニューギニアに送り込まれた、その前後のことだけが書かれています。それ以後の“本当”の戦争体験の惨状は、預けられた手記「ウエワク」(針谷和男)の中の、目撃した“幽鬼”の事として、あるいは伝聞として書かれています。そこでは以下のように父の呟いた、「捕虜と逃亡兵は食べて良かった、ハンゴウからはみ出した“肉”を持ち運んでいるのを見た、僕は食べなかった」に、類する出来事が言及されています。「・・・その半ば折れ朽ちた床板の上に、つい今迄気が付かなかったが、三体の誰とも分からぬ兵隊の屍体が枕を並べて横たわっているのだった！汚れた衣の痩せこけた寝がさのない、ぼろ切れのような死骸。夕陽の残光にかわり、淡い月光がそれらの上にも、あまねく射しそそがれはじめた時、突然「フフフ」低い怪しげな笑い声と共に、その真中の一体が、力なく起き上がったではないか！そして暫くすると、彼は用心深くあたりを何

度も見まわしながら、くずれゆく死臭粉々たる戦友の屍体に挟まれたまま、取り上げた飯盒の中に痩せ細った手を差し込むと、何かを掴み出して、むさぼり暗い始めた。ああ、彼は食欲の煩惱を断ち切れず、あの世からひととき、よみがえった幽鬼であった」「そして斃れた死体から、その戦友にとっても生命から二番目に大切なものであったに違いない、なけなしの食糧や薬剤、衣服その他の持ち物などを奪い取って、わがものとしていた。甚だしきは、その戦友の人肉をすら切り取ってそれを食べているという噂さえ広がっていた。もはや、人倫も道義も、気の狂ってしまった、その者たちの頭の中には、なくなってしまったのであろうか」(前掲「ウエワク」)。

父の手記は、昭和18年8月前後で終わっていて、父が呟いた「捕虜・逃亡兵は食べてよかった、ハンゴウからはみ出した“肉”を持ち運んでいるのを見た、僕は食べなかった」という、それから始まるパプアニューギニアの戦争の惨状について書くということはありませんでした。

2010年7月9日、父の89年の人生は終わることになりました。20代の初めころに始まった太平洋戦争では、パプアニューギニア地域における作戦は、「作戦参加総兵力三十五万人以上、生存帰還者は約十三万人」の惨澹たる戦場でした。“生き残り”として

始まった父の戦後は、累々と積み重ねられた戦友たちの屍の、消し去ることのできない記憶を生きることの意味しました。

「捕虜と逃亡兵は食べて良かった、ハンゴウからはみ出した“肉”を持ち運んでいるのを見た、僕は食べなかった」については、呟く以上のことはしませんでした。父の、自ら書いた手記の後の昭和18年末に、補給の途絶えた父たちは、既に飢餓に近い状況にいました。敵（豪・米軍）に追われ転戦という名の敗走をするようになった1万3千人に起こったことが、「ウエワク」には書かれています。「ウエワク」は、その時の戦場の惨状について、“よみがえた幽鬼”のこととして、あるいは“伝聞”として描き、父の場合は“・・・僕は食べなかった”という呟きでした。“修羅場”の真っ只中にいた自分を描く事も、“修羅場”の真っ只中にいた自分を呟く事もしませんでした。描くことも、呟くことも出来なかったのではなく、許されなかったからです。なぜなら、20代初めの青年たちに、飢餓の戦場を強いたこの国は、その戦場の惨状を、父たちだけが“衣を裂き”“荒布を身にまとう”ことで、封印してしまいました。手記「ウエワク」を書いた人も、“・・・僕は食べなかった”という父も、飢餓の戦場の真っ只中にいて、そこで繰り返される修羅場と無関係ではあり得ませんでした。20代初め

の青年たちを、修羅場の真っ只中に放置したこの国は、その結果を背負って生きること、当の青年たちだけに強いることはあっても、国家としてえぐることをしないまま、戦争を過去のものとししました。もし誰かが呟き以上のこととして口にしてしまった時、その人だけが孤立することになりました。

サマリヤの女が“わたしを助けてください”と訴えた時、王は“衣を裂き”“荒布を身にまとい”ます。女の嘆きを、自分のこととして引き受けるのではなく、王自らの保身のこととしてです。パプアニューギニアの惨状に口を閉ざしたこの国は、国家として保身し、同じように口を閉ざした父たちは“衣を裂き”個人として“荒布を身にまとい”敗戦から後のこの国を生きることになりました。

そして、敗戦から70年、89歳の生涯を終えることになりました。父の告別式の式辞を述べさせていただくにあたり、40年前に聞いた父の呟きの「捕虜と逃亡兵は食べて良かった、ハンゴウからはみ出した“肉”を持ち運んでいるのを見た、僕は食べなかった」は「・・・僕は食べた」であったかもしれないことを、もっともっと聞いて、それを引き受ける位置に、父が亡くなる日まで立てなかったことは、取り返しのつかないことを、ここで申し上げざるを得ません。

青年たちにだけに“衣を裂かせ”
“荒布を身につけ”させてはいけな
かったのです。

(以上、2010年7月11日に、故松尾
俊美の告別式での式辞に、いくつか
の事を付け加えることになりました。
中でも「・・・僕は食べた」は、父の
つぶやきではありませんでしたが、
もしそうであったとしても、それを
受け止める位置に立たなかった“息
子”の恥として、ここに書き留めるこ
とにしました)

～今月のいのり～

雨の続く毎日、いつもと同じようにたくさんの出来事がありました。

傘をさしながらみんなが集まって七夕のおまつりを楽しんだこと。

大切な方を天国へお見送りして涙を流したこと。

オリーブの木にかわいい三つ子を実を見つけたこと。

お友達が遠くに引っ越す知らせをうけたこと。

雨は関係ないはずなのに、空からやってくる雨粒が、地上の命を応援しているようにも、私たちの流しきれない涙であるようにも思います。

神さまどうか、喜びと悲しみを包む平凡な一日一日を、私たちが大切に過ごすことができますように。

ふと、気付いたら雨が止んでいた、、そんな一日を過ごすことができますように。

(大平 有紀)

“ ささにたんざく たなばたまつり～ ”

ほしまつり2週間前の6月19日(土)に、門にほしまつりポスターが飾られました。散歩に行こうと門を通るたびにそこで一度立ち止まって、「キラキラ～ ほ・し・ま・つ・りって書いてあるね！」と話していたぼっぼ組の子どもたちです。(ポスターの“ほしまつり”の文字の色は、金・銀色でキラキラ!でした)ポスターを眺めながら、ささにたんざく たなばたまつり～ を歌ったこともありましたが、いよいよほしまつりが迫ってくると、「あと かい寝たら～！」と指折り数えながら、当日までの日々を楽しみ期待に胸を膨らませていました。ぼっぼ組にとっては初めてのほしまつりです。一体どんな時間なのか、きっと想像もつかなかったかもしれないけれど、ポスターを眺めたり、歌をうたったり、お店の準備、笹飾り作り、みんなでおまつりを作り上げていく中で、ドキドキ!わくわく!どんな楽しいことが起こるのか 楽しみにしながら過ごしていたのではないかなあとと思います。そして、待ちに待った7月3日!いくら雨の多い時期とは言え、ここまで降るのー!!と叫びたくなるくらいの雨でした。「ありますよ・・・ね・・・」なんて呟いていた方もいらっしゃいましたが、もちろんあります!テントを張って、園庭には大

きなブルーシートで屋根が創られました。各お店の配置の変更があったり、様々な工夫がなされて行われた2010年度のほしまつりです。この日を楽しみにしている子どもたちがいて、心を寄せて下さり、お働き下さる方々がいて、そんなたくさんの方々がいらっしゃったからこそこのほしまつりです。すべての方に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。10日間ほど、願いごとが書かれた短冊が風に揺れていました。空高く上がった短冊を13日(火)にきれいに整えてくださいました。今は1本の太い竹が堂々と立っていて、園旗が風に揺られて、幼稚園を見守ってくれています。そんな竹をふと見上げたHちゃんは、「あれ?!どうしてなくなってるの?とことことってのぼってとったのかなあ～」と不思議そうに竹を眺めていました。突然「きょうはほしまつりないの?」という子もいるぼっぼ組、初めてのほしまつりがしっかりと心の中に残っている様子。共同のお楽しみはまだまだ続きます!お母さま方の共同まつりの準備も始まっています。

この4、5年“生と死”について考える機会をたくさん与えられています。大切な方との永遠の別れに悲しみ、寂しさでいっぱいになったことが何度もありました。そんな時に「大

切な人は神さまのみもとで永遠の幸せを手に入れたんだよ」と声をかけていただいたことがありました。悲しみに変わりはありませんが、その一言に支えられたこともありました。大切な人との別れが近くなっている方に、自分には何ができるのかと考えたり学ばせて頂いたり、そんな中で言葉の大切さと同時に難しさを改めて感じました。

自分があり、今ここにいたくさんの方々との出会いがあり、今の毎日が与えられています。お別れした方々を覚え、感謝し、これからの日々を家族、仲間、子どもたち多くの方々と共にしっかり生きていこうと強く思います。このように考える機会を与えられたことを感謝します。

幼稚園では、1学期終了を迎えようとしています。保護者の方々、地域の

方々、遠くから心を寄せてくださっている方々、多くの方々に見守られて、子どもたちとの毎日が過ごせたことを心より感謝します。

暑い日々が続きますが、みなさまの健康が守られますように。素敵な夏をお過ごしになられますよう、お祈りいたします。

(延原 光)

すずや便り

こんにちは。爽やかな～と想像していたらあっという間にかき氷が恋しい気温になりましたね。「今日は湿度90%です」とテレビで言っていたのには笑ってしまいました。霧の中に見えるようなもの?でしょうか。湿度と気温の上昇とともに、バラの新芽に大量のアブラムシが発生していました。新芽の薄い色と、アブラムシの透明感のあるきれいな黄緑色が一体化

してなかなか気付かなかったのですが、ベランダに出て「枝が動いている?」と思った瞬間、ムククの「叫び」状態になりました。(お食事中の方、ごめんなさい)。昨年までは見かけなかったのも、やはりこの湿度のせいかな、と思いつつ必死で駆除方法を検討。殺虫剤も試しましたが、物理的に歯ブラシで落とすのが簡単＆確実なので朝の日課になりました。自己流 9

できれいになった枝に木酢液をシュッとかけています。

「あおいめのこねこ」(エゴン・マチーセン、福音館)では、なかなかえさを捕れないあおい目のこねこが1のまきで「はえを一ぴき」、2のまきで「小さなかを一ぴき」とって「なんにもたべないよりは、ましでした」と食べます。猫って虫も食べるんだ~と思いつつ3のまきへ。小さなあぶらむしを一ぴきとったこねこは「そのむしは、くさくて、べとべととしていて、つかんだ足をふっても、とれません。なんにもたべないほうが、ましでした。」となってしまう。3日間で虫を2匹しか食べていないのに、口に入れる気にもならないとは...。さすがにアブラムシを素手で触る勇気はなくなります。繁殖力も旺盛で、ちょっと歯ブラシをサボると子ども(多分)が増えています。大きくて堂々としたのが何匹かいて、針先程

の小さいのがぞろぞろ。また新芽の先端の柔らかい所に子どもたちが密集しているのです。きっと柔らかくておいしい場所はすぐわかるのでしょう。テントウムシの中にはアブラムシやハダニ(これもバラにつきやすい虫)を主食とするものがあるそうなので、テントウムシを連れてきたら、朝の歯ブラシから解放されるかもしれません。どこから連れてくるんだ~と調べ始めると、ちょうど夏休みの自由研究になりそうですね。

(富家 香麻里)

みかん便り

暑い... 梅雨のせいでジメジメが半端ないです。クセ毛なんでこの時期はいつも憂鬱です。

この前、久しぶりに京都へ帰りました。半日ぐらいの滞在でしたが、愛媛の2倍ほどの湿気に参りました。しばらく帰りたくない和本気で思いましたよ(笑)6月中に梅雨が終われば、

ていましたが、今年も無理そうですね。残念。死ぬまでに1度は見てみたいと思います。

・6月は結構悩んでばかりの1ヶ月でした。去年まで毎年やっていたことを今年はやりませんでした札幌YOSAKOIソーラン祭りの遠征です。いつもなら4月から2ヶ月間自分を追い込み、みんなと一緒に臨むこの祭

りは、1年で唯一自分を真剣に見つめなおす時間で、少しだけかもしれませんが自分を成長させられる時間でした。

・5年間いたチームを辞めて、新しく進もうと思って半年間過ごしてきましたが、やっぱり6月は気が重いです。これから毎年こんな気持ちになるのかって思ったら嫌ですね。

ゼロから新しく始めようと思いきっぱり辞めたんですが、辞める相談をしている時に代表から言われた「今まで積み重ねてきた大事なものを全部捨ててしまうような奴が、新しいことを始めて成功するとは思えん。なんでもかんでもゼロからはじめてたら人生、時間が足りんやろ。成功するのは小さなことでも捨てずに全部受け入れていく奴や。」という言葉が未だに心に引っかかっています。どうなんかなあとは思いますが、聞き流せない言葉でした。ずっと尊敬してた人から聞いた最後の指導やったからかもしれませんが。

違う道に進んだと思う自分と、何かしらのことから逃げただけなのかと思ってる自分。気の持ちようっていうのはその通りなのか、甘えなのか。いろいろ悩んだ結果、よくわからなくて半ばあきらめました。

しばらくは忘れられるんやろうけど、12月の年末ライブの時期や、また来年の6月、札幌の時期になったら悩み出すんだろうと思います。普段何も

考えず、悩みとは程遠い性格をしていたので、悩みの解決方法がよくわからないです。

今度教会に行ったら誰かにモヤモヤしていることを聴いてもらおうと思います。迷惑やろうけど(笑)

・7月になればテストや課題がいっぱい出てきます。やらなければいけないレポートは6枚。「よし、やろう！」って思いますが、パソコンを目の前にしたとたん頭痛が。もう身体が課題を拒絶している。ってなわけでまったく進んでません。

ポチポチ片付けていきます！

それではよい夏休みを

(河村 高志)

2010年7月 あんなこと こんなこと...

教会学校から

《6月の活動報告》

6月6日(日) クリーン大作戦

6月13日(日) 花の日合同礼拝

6月20日(日) お父さんたちと一緒に遊ぼう

6月20日(日) 淡路島草刈ワークにみんなで参加しました。

6月27日(日) ストローあめを作って遊ぶ

《7月の活動予定》

7月4日(日) かき氷を食べよう

7月11日(日) キャンプ・ソングを歌う! Part1

7月18日(日) プール遊び

7月25日(日) キャンプ・ソングを歌う! Part2

7月28日(水) ~ 8月1日(日) 公同子ども沖縄キャンプ

8月4日(水) ~ 8月7日(土) 公同子ども後川キャンプ

大切な贈り物・津門川 9 4

“ 津門川しらべ ”

つとがわ 編集後記

母が亡くなって、父が亡くなって、そして義父が亡くなりました。母の時は、危ないという知らせがあって、駆け付けた病室で、付き添うことになった早朝、呼吸する様子が変わる様子に気が付き、呼んだ看護師さんが駆け付けた時、呼吸が止まりました。“今際の時”ということがあるとすれば、それに立ち会ったことになりました。父の時は、危ないという知らせがあって、駆け付けたけれども持ちなおすということを繰り返して、結局は間に合いませんでした。義父の死は、ゆっくりと引き寄せるようにやってきました。病身ではなかった義父は、飲み込んだものが肺に入るといふことで肺炎になるということはありませんでしたが、ゆるやかに老衰して行く晩年を過ごすことになりました。食事をとることができなくて、点滴になった時の摂取カロリーは、1日約200キロカロリーでしたから、亡くなるのは時間の問題でした。しかし、直前まで“娘”の呼びかけに答え、付き添うことになった早朝、何度か深く呼吸した後、静かにそれが止まりました。義父の“事切れる”時に立ち会うことになりました。

(K)

ドンみたいなのがいる！！孵化しためだかが泳ぐ飼育ケースの中を覗き込むと、一匹、きつとイチパン初めに産まれためだかでしょう、大きいのが泳いでいます。泳いでいるみんなが兄弟だと思おうと面白く、イチパン小さな子には頑張り～！と声援を贈りたくくなります。そろそろ飼育ケースじゃせまくなってきたので、大きなのに移そうと思っています。めだかの引っ越し～暑い夏の間、めだかたちも元気でありますように。

(I)

読書が趣味の一つです。読みはじめると止まらなくて、「本の虫」になってしまう私。ちょっとした信号待ちでも、本を取り出してしまいます。出勤時間を利用して、1ヶ月に4～5冊くらい。

1冊終わると次。また次、とどんどん出てくる父の本棚。ミステリー、ファンタジー、時代物。ジャンルを問わず読んでいます。面白い本ないかなあと、本屋へ行くのも楽しみです。

(Y)

楽しみにしていた16日の島の音楽会。そこで聴いた美しい四重唱 私にとって懐かしく感じるひとときでもありました。合唱団に通っていた頃歌った曲もありクラシックや四季の歌をうっとり～しながら聴かせていただきました。そして歌いたいなあという思いが再び出てきました...

毎週礼拝中の賛美歌を歌うとき、通っていた頃

に比べると全然声が出なくてそんな自分にショックだったりもします...OB会もあるみたいだし、時間を見つけて歌いに行こうかなあ～

(N)

1984年一回目となる脳卒中で倒れた義母。その後それまでの農作業をはじめとする体力的に厳しい日々はなくなったもの、周りのことで心を痛める年月を過ごし、そして最後癌の発病がわかったあと再びの卒中で動くこともままならずま病院で過ごし2004年3月最期を迎えた。それから義父の弟、思いがけない義姉の死、義母の妹、そして昨年義父の見送りを経て、7月9日の深夜父を看取る日を迎えた。心拍数が下がり、呼吸低下になりながらも2日近く最後をがんばる姿に「この年齢の人はなかなか～なのよ」と看護師さんが言われた。戦前、戦中、敗戦直後の並々ならぬ時間を生きてきたという意味で体力もあり精神力もありとの思いをこめてのことばだろう。先に見送ることになった人たち、どの人もその「戦争」を背負った意味でそれぞれに「壮絶」な人生だった。11日式中に「アメージンググレイス」と「もっとずっと」の歌が流れた。式辞も送ることばもこれ以上のものはないというのに加えて静かに流れた2曲の歌は送る人たちの心も癒してくれた。16日夜、その歌を歌ってくださった方も出演してのコンサートが開かれた。ハーモニカの演奏者との新たな出会いがあったコンサート、父はハーモニカが上手だった。もう確かめるすべもないが、その夜に流れた「埴生の宿」を吹いていたのがなんとなく記憶にある。映画「ビルマの豎琴」の水島上等兵が日本に帰らない決断をする最後の場面はこの曲で彩られていたように思うが、幼かった当時に、戦争のことを語らない父とふと重ね合わせた古い時間が思い出された。亡くなる数か月前まで古い歌を歌うと、声を出して元気に手拍子もしてくれていた。余談ですが、長生きの家系なのか双方の親のきょうだいが90を超えて元気に生きている。またハーモニカ奏者は中学生から高校生の時期を過ごした教会で、共に若者の会を運営した後輩、そのお連れ合いの弟子であることがわかり人のつながりにあらためて驚いた。

(J)